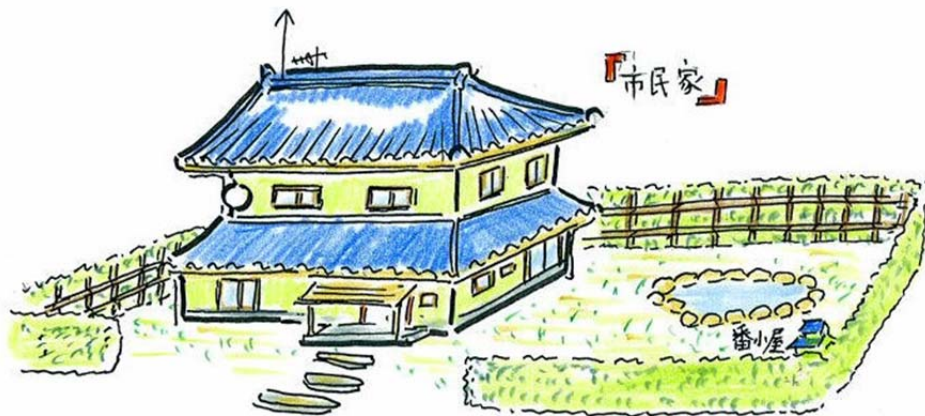


# ◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

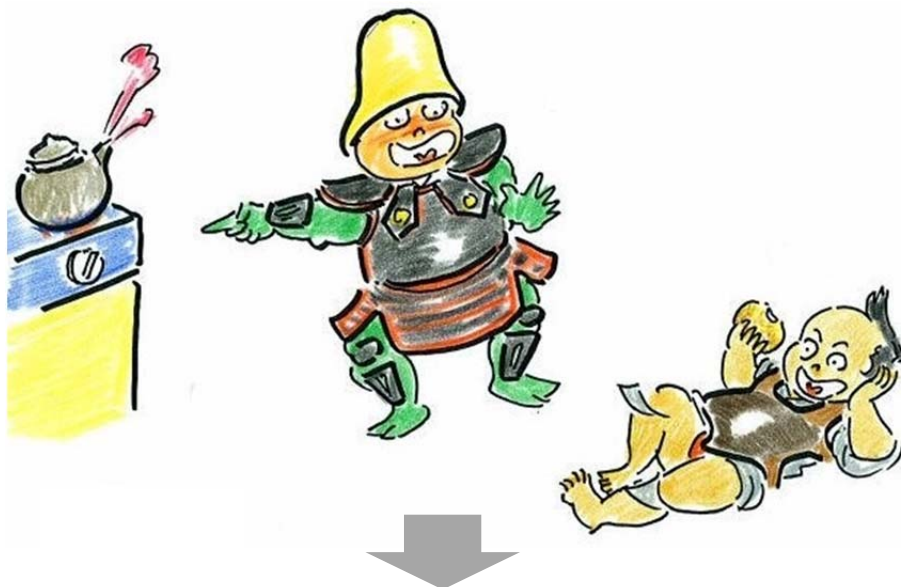
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。





そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女<sup>えん</sup>援ちゃんには何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

<sup>てんとく</sup>点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！



援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

### 主な登場人物



援ちゃん 5歳



支援くん



ご助 (中間)



ミーちゃん (飼い猫)



ママ



パパ



閻魔様

# 支援くんの火災予防奮闘記

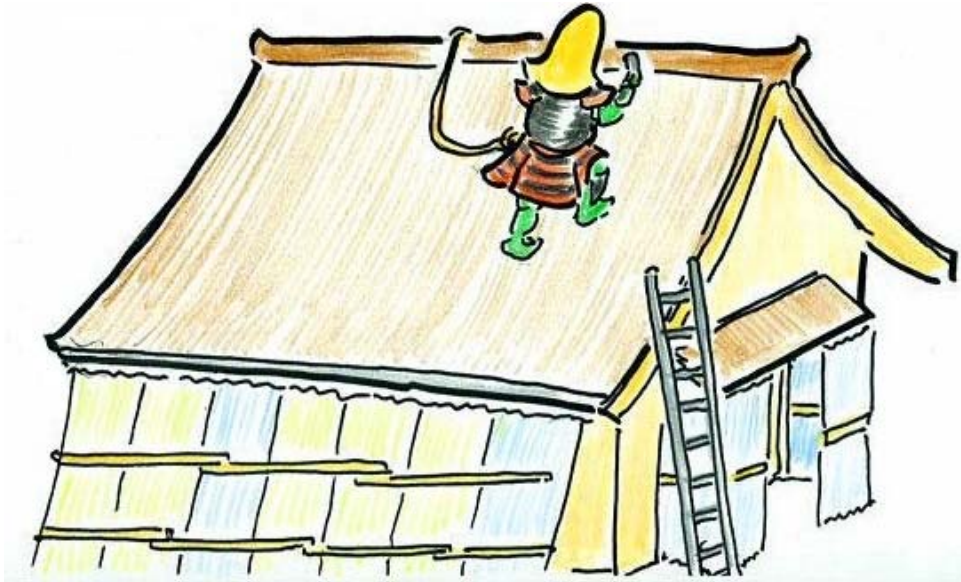
～火災を起こさないために～

Vol.24

秋祭りが過ぎ、木枯らし1号（秋の最初に吹くおおむね8m以上の北よりの風）が吹きますと、冬将軍がお出ましのため支度を始めますのじゃ。



厳しい冬に備え拙者達も朝から番小屋の冬支度を始めたのじゃが、一刻も前に雑巾掛けを命じたご助の奴が母屋に行ったきり帰って来ませんのじゃ。



やきもきしておると、さらに一刻ほどもして漸く帰って参ったご助めは雑巾をマントのように羽織り、マッチ棒を咥え、番小屋の入り口で突っ立ったまま、手伝いをする気配もありませんのじゃ。



「ご助？どーゆう料簡りょうけん（意：考え）じゃ。早う雑巾がけをせんか！」と叱りつ

けたのですが、それには答えずご助の奴めは・・・

「ひゅうう・・・」と大きく息を吸い込んだかとみるや

「げほっ、ごほっ、ごほほほっ」と大きくむせ返りましてな。



ごほごほと咳き込みながらも拙者に何かを伝えようとするので

「な、何がしたかったのじゃ？」と見かねて拙者が訊くと

プツ とマッチ棒を吹き出すと「あ、あしには関わりのねえことござんす。」

と言い放ち、雑巾を大きく払うと拙者に背を向けたのでござるよ。

「な、何という言い草じゃ！それが主人に向けて言う言葉かっ！」と更に叱り

つけると

「だ、旦那様、これはあれですよ。」というご助に



「これはあれですよとはどれじゃ？」と聞き返すと

「ほれ、上州・・・」

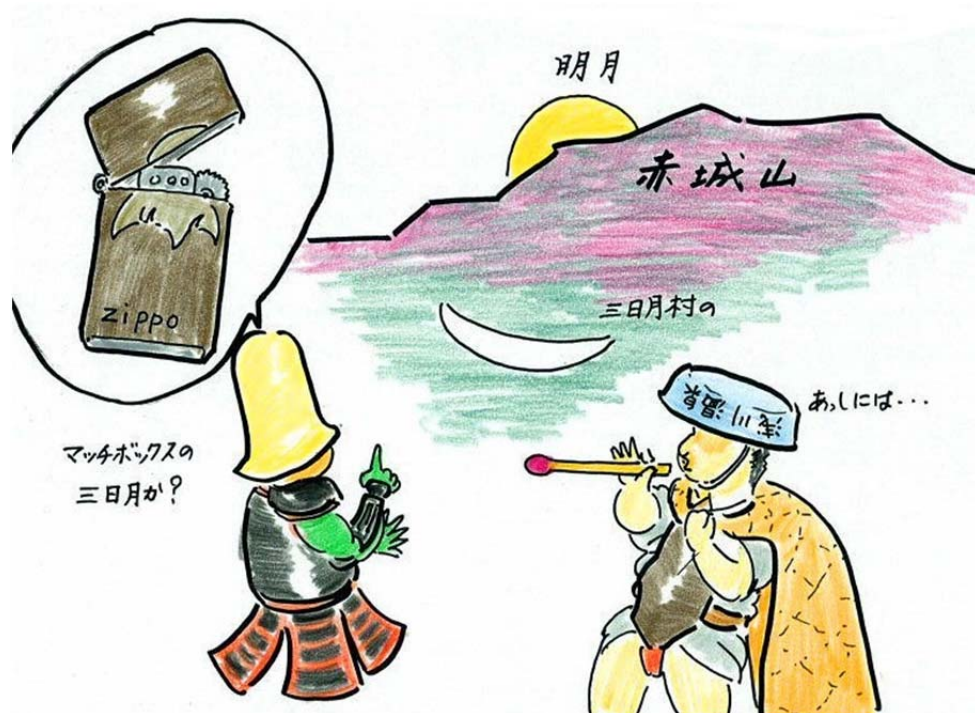
「おっ？ そうか上州といえば空っ風！ それで火事に気を付けよと？」

「ち、違いますよ上州は新田郷三日月村の・・・ほれ。」

「三日月・・・ああ、あれか！」

「さ、さいです！」

「ジッポライターのマッチモデル三日月のことじゃな？それが欲しいと？」



「ちげーますだよ。何ですかジッポのマッチモデル三日月なんて！収集家じ

ゃなきゃ分からねえことを言わねえでくだせえよ！あしには関わりのねえで

分かりやせんかね？」



「・・・関係ないのならそれで良くないか？遅くなったぞ、早く掃除に掛か  
らんか。」と話しておるとヒュウウ・・・と、この秋一番の寒風が拙者達を襲  
ったのでござる

「ううっ、さ、寒いのお木枯らし1号のようじゃ。」と拙者が独り言をゆうのに

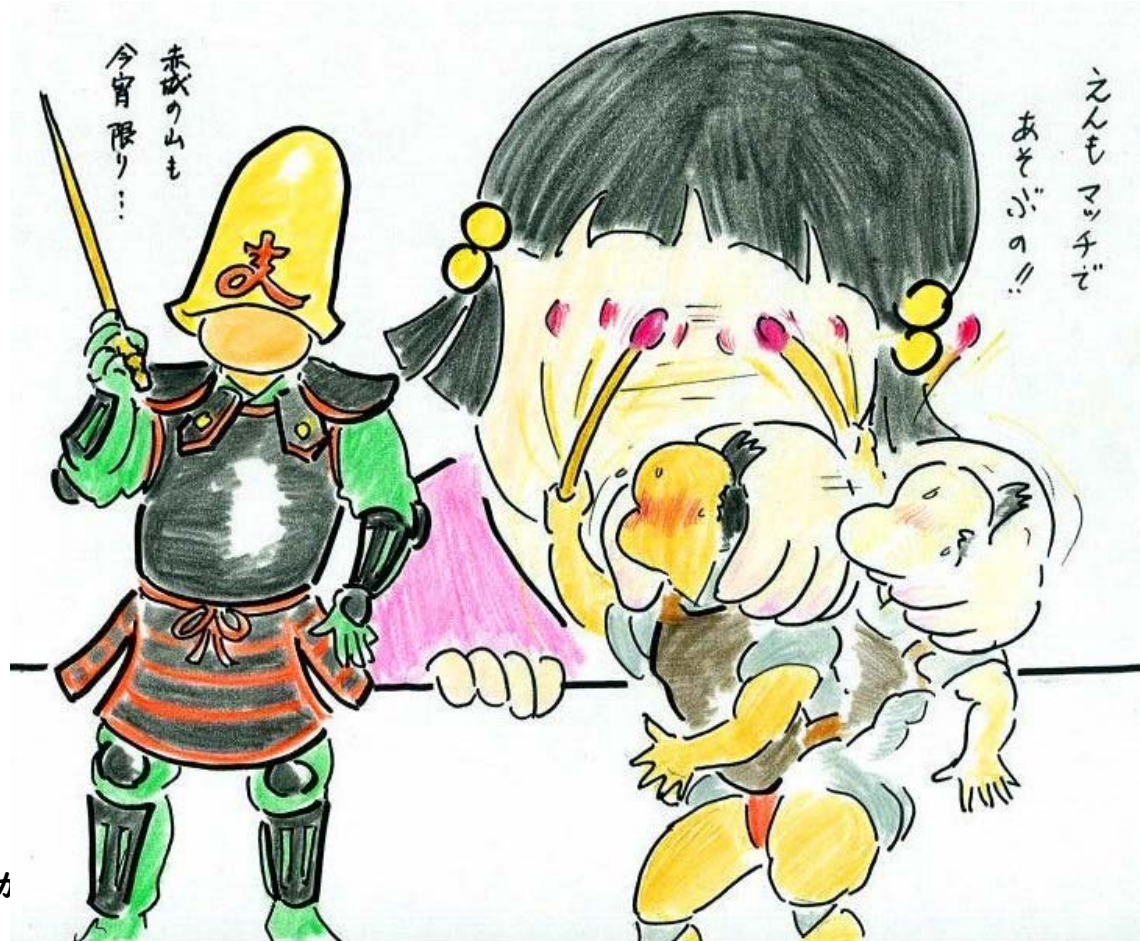
「そ、それじゃ旦那様！」とご助。

「それじゃ・・・とはどれじゃ？木枯らし・・・」

「さいです。木枯し紋次郎でござんす。」



「紋・・・次郎？あれは確か爪楊枝ではなかったか？」



「というか・・・姫様もマッチ棒で遊んでおいでか？」

「へえ、そりゃあもうペツ、ペツ、て大変に喜ばれましたね。」

「そ、それをお止めもせずに、おのれは一緒になって遊んでおったのか？」

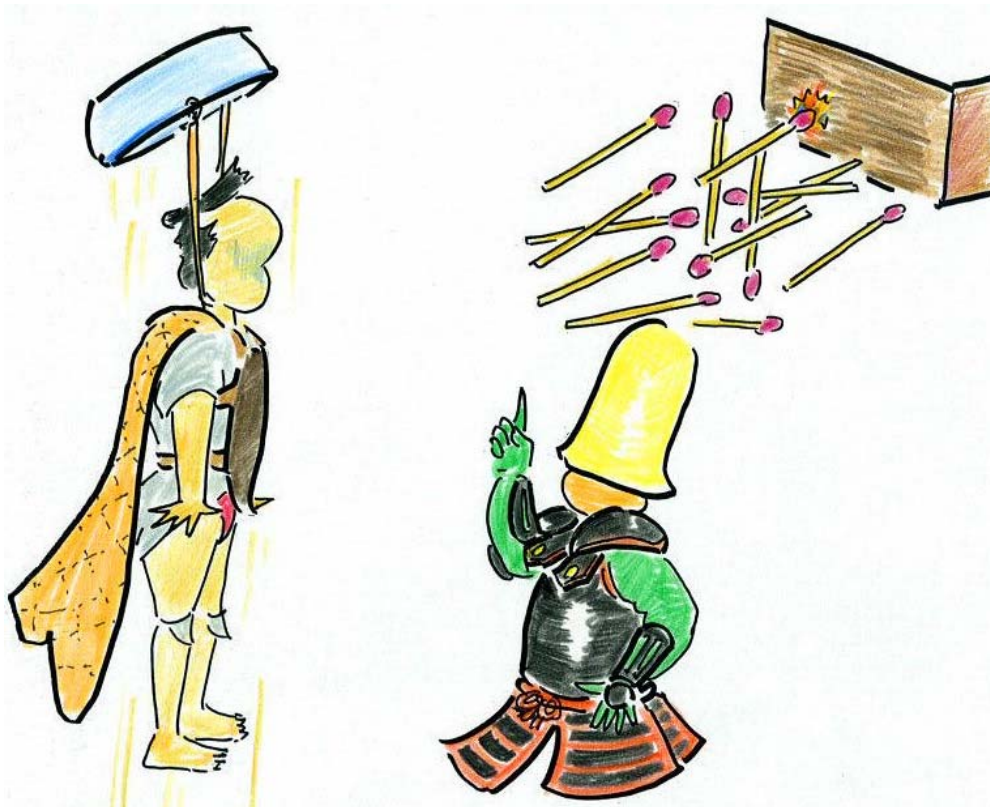
「・・・へえ・・・何か不都合でもありやしたかね？」とのんきに答えるご助に

「馬鹿者！マッチは箱から出しておくと衝撃で発火の危険があるのじゃ。火災  
予防教習所で習ったじゃろ！忘れたか！」

「エーッ！」と棒立ちになるご助に

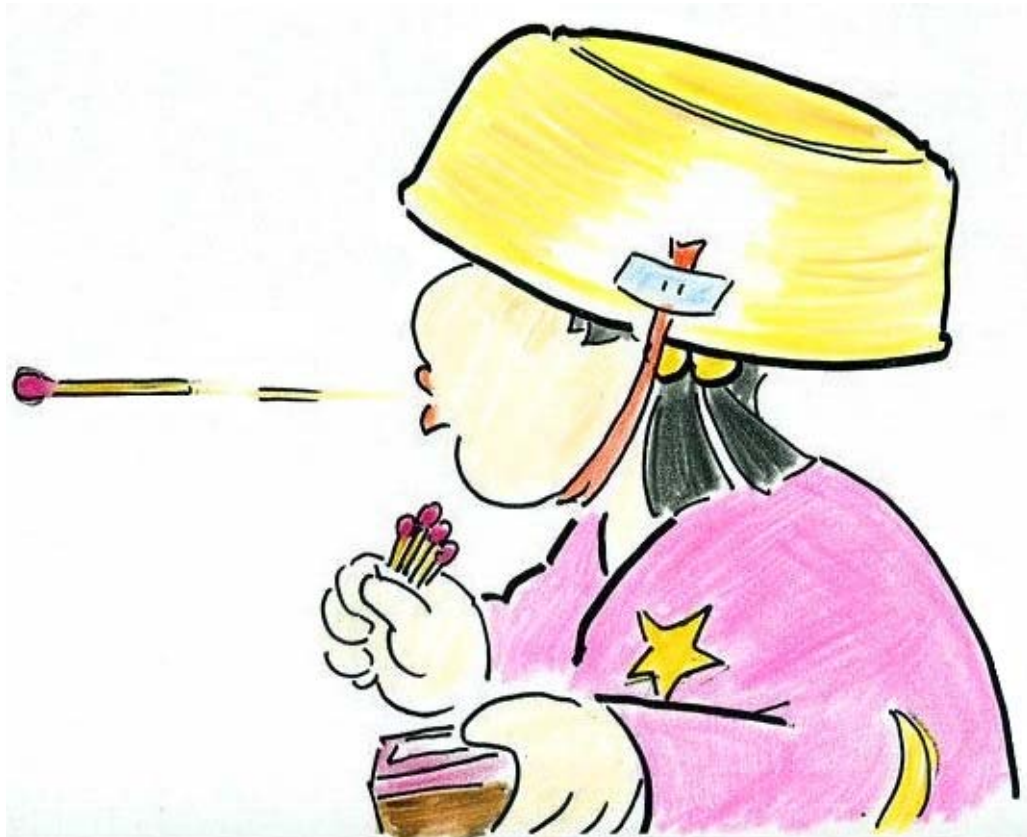
「マスオさんの真似をしておる場合か！着いて参れ！直ぐにお屋敷へ参るぞ。

姫様どうかご無事で！」と拙者とご助は母屋へと向かいましたのじゃ。



「どおーこかで・・・プツ、だあーれかが・・・ペツ、きいいーときみを・・・  
プツ・・・」

お屋敷に到着した拙者たちが耳にしたのは、居間の方から聞こえる姫様の奇妙  
な歌声でござった。



居間に駆け込んだ拙者が見たのは徳用マッチの箱を左腕に抱え、次から次へとマッチ棒を口に咥えては吹き出す姫様のお姿じゃった。

「あっ、ちえん。ちえんも、もんちろう（紋次郎）ごっこちないか。おもちろいぢよ」と姫様。

見れば姫様がマッチを吹き出す先にはミーちゃんが、これがまた器用に飛んでくるマッチ棒を空の徳用マッチ箱の方へ弾き返しておるのじゃった。

「だ、旦那様・・・楽しそうじゃねえですかい。」とすり寄るご助に

「おのれは懲りん奴よの。あまめはぎの真似をしてあれほど痛い目に遭うたことをもう忘れたのか？マッチ数本であの騒ぎじゃったのに姫が遊んでおられる沢山のマッチに火が付けばどうなると思うておるのじゃ！」と大声で叱りましたのじゃ。

その声の大きさに驚いたミーちゃんの手元が狂い、あらぬ方向へと飛び散るマッチ棒は、冬に備えて奥方様が空焚きをしておるストーブへ！

「あぁっ、危ない！」と叫ぶ拙者の声よりも素早くマッチ棒を目掛け飛び込んだのは何とご助でした。



しかし、やはりご助はご助でござった。「わあああああ・・・」と叫ぶご助の、その体はマッチ棒よりはるか手前に落ちると、したたかに頭と胸を床に打ち付けたご助は苦悶の表情のうちに意識を失ったのじゃった。

一方、マッチ棒は真っすぐにストーブの炎へと吸い込まれ、もはやこれまで。

3代にわたりお仕えしてまいった市民家も姫様のマッチ棒遊びで火事の憂き目にいい・・・と拙者は覚悟したのじゃ。

その時じゃ

「えんっ！！！！」とマッチ棒を払い落とす奥方様のお姿が



「ええええんっ！マッチで遊んで火事になったらどうするのっ！」と姫さまを叱る奥方様のお姿は、前回お出ましの閻魔様にも勝る迫力で・・・。

「ち、ちがうによ・・・ママ・・・こりえは・・・」と後ずさる姫様。

「何が違うの？マッチ棒をこんなにばらまいて・・・援はこの家が火事になっても良いの？パパやママと一緒にいられなくなっても良いの？」と更に詰め寄る奥方様に

「あ、あっちには・・・きゃきゃわりのにええことで・・・」と逃げ出す姫様。

「逃がすかっ！」と姫様の襟首を捕まえた奥方様。





「いやー、助けてちえんっ・・・お尻ペンペンは嫌あー」と叫ぶ姫様をよそに



「やれやれ、良かったのお。」と拙者は居間を後にしたのですじゃ。

あれれ？何か忘れておるような・・・そうじゃご助じゃ。ご助を連れて帰らねばの。ご助め、体を張ってマッチ棒を追いかけたのじゃからのお。少し見直したわい。」と倒れたご助を抱き起すと

「・・・だ、旦那様っ。に、逃げねえと！」と立ち上がろうとしたご助は

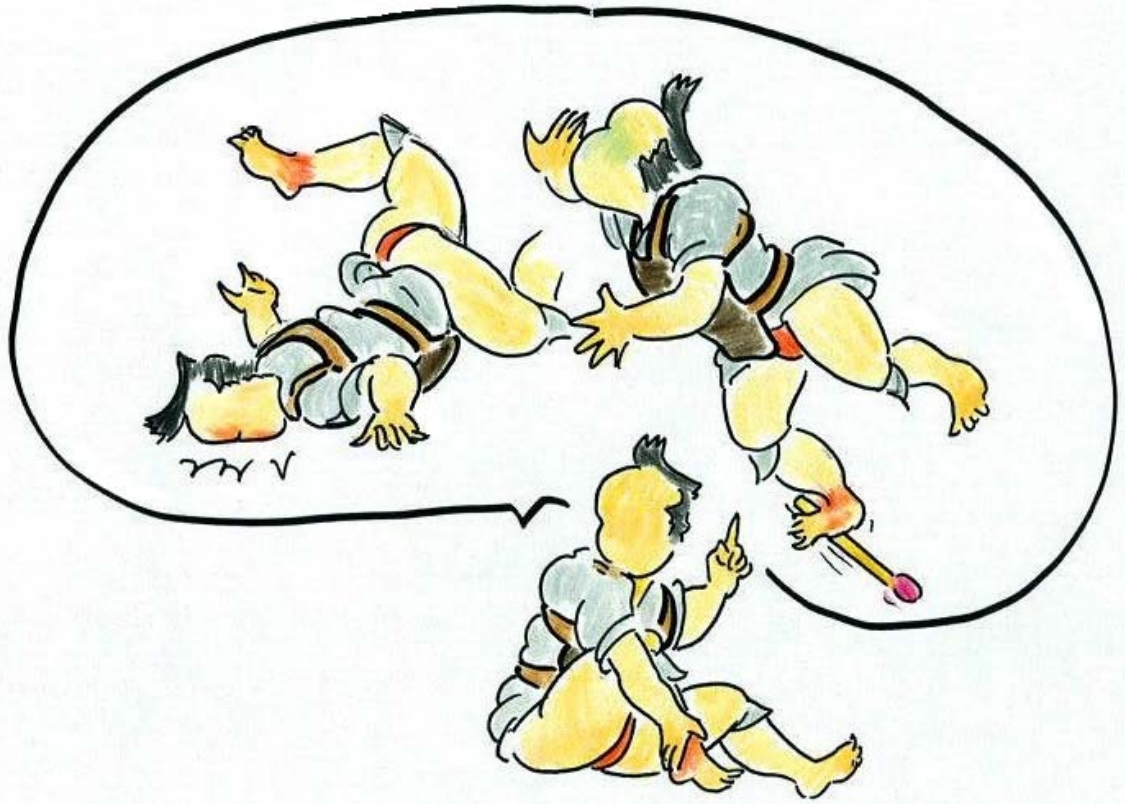
「あてててっ・・・」と右の足首を抱え、また倒れ込んだのじゃった。

「だ、大丈夫かご助よ。」と気遣う拙者に

「だ、大丈夫じゃねえですよ。旦那様の先に居間から出なきゃと駆けだしたところミの奴が弾き損ねたマッチ棒が転がってやしてね。」

「うん。それで？」

「それに足を取られてストーブの方へ転がったんでさ。もうストーブが目の前に迫ってきて・・・こ、恐くて気を失ったんでさ。それで目が覚めたら捻挫でしよ。もう踏んだり蹴ったりでさあ。」と・・・。



「・・・う、うん。やはり・・・おのれは・・・ご助じゃの。」

「???何言ってるんです?ああ痛え・・・旦那様、今日の食事当番はできやせ  
えんで宜しく。それと、早く肩貸してくだせえよお。」とすが縫るご助に

「足が治るまで、いや、ずっとそこにおれ。もう番小屋へは帰って来んでよい。」

と言い捨てる一人で番小屋へと引き揚げましたのじゃ。

後には「お尻ペンペンは嫌あ、もうちないからあ」という姫様の声と

「殺生ですぜ旦那様あ・・・旦那様あ腹が減ったですう・・・旦那様あ」の声

だけがしばらく続いておりもうした。



(おわり)